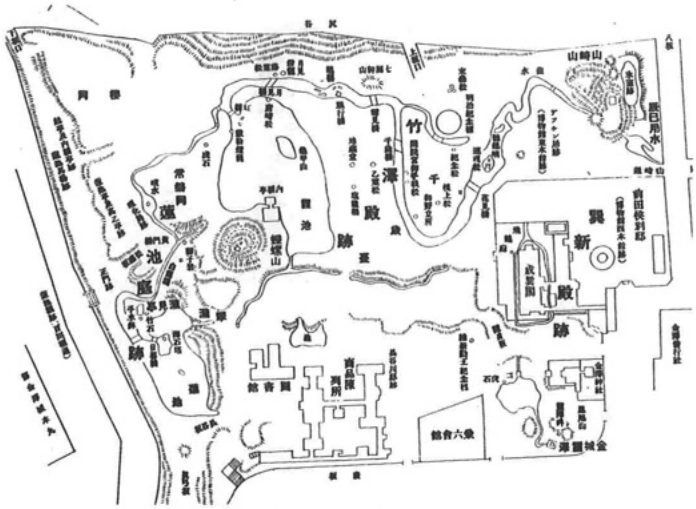
# 忘れられた記憶——前田慶寧像について

森　仁史

金沢の兼六園といえば押しも押されぬ観光名所であり、その魅力の源はかつての大名庭園がよく保存されていることにあるとされている。しかし、実は変遷著しかった明治期について石川県立歴史博物館の「兼六公園の時代」展が明らかにしてくれたところである。それは身分制社会において大名が史的に愛好した資産が揺れ動く社会と意識の荒波にさらされてたどった、顚末を明かすことになった。その後ここに設置されたひとつの銅像について考えてみたい。



1　戦前期兼六公園の見取り図（『兼六園全史』兼六園観光協会、1976年より）

2　加越能維新勤皇家表彰標　1930年

前田家庭園は明治四年（一八七一）にその一部が初めて一般に開放され、六年から太政官通達により公園として整備されるが、敷地は依然として前田家の所有であり、とくに南西側の出羽町に面した一角は第二代市長となる長谷川準也が購入して、宅地としていた。このため、この一角はもともと庭園であった山崎山や蓮池庭〔図1〕などの区域とは異なって、とくに変化が烈しいことになる。

ここに幕末勤皇殉難者を記念する碑の建設が計画される。本康宏史の研究によれば、勤皇家表彰を求める運動は明治二十七年（一八九四）に始まった。これは二十四年にいわゆる「元治の変」の犠牲者が贈位されたことが契機となったようである。その後昭和四年四月加越能郷友会に金沢在住のこれらの人々から維新志士の記念事業が提起され、大方の賛同を得て、七月には貴族院議員木越安綱を会長に選び加越能維新勤皇家表彰会が結成され、前田侯爵邸に事務局が置かれた。同会は総額七万円を目標に東京と北陸三県で募金を募った。記念標のデザインを美校図案科教授の島田佳矣に、設計を前田健二郎、銅像製作を朝倉文夫塾の吉田三郎、銘板を東京高等工芸学校工芸彫刻部教授の畑正吉に依頼することにした。大半が加越能の出身であり、斯界の権威者を選んでいる。十一月には表彰すべき勤皇家として前田慶寧ほか三十三名を確定した。尾佐竹猛に伝記の起草を依頼し、記念碑建設地として兼六公園内の成巽閣隣接地を選んだ。しかし、すでに兼六公園は名勝指定を受けていたため、文部省に申請し、十二月に建設許可を得ることができた。

同会は同時に記念標の二十五分の一模型を作成し富山県庁に寄贈した。これとは別に吉田三郎の助手を務めた金沢出身の彫刻家木村桂二の手になる高さ八寸のレプリカが製作され、市内片町の谷口金陽堂から七円で頒布された。谷口金陽堂は明治八年に旧加賀藩士であった谷口吉次郎が創業した九谷焼

を扱う商社であり、海外輸出に力を注ぎ、明治二十八年（一八九五）には神戸に支店を開いた。明治維新後、地元の名産品を商うことにしたのだが、九谷焼を古くから扱ってきた松雲堂（小松）での修行が功を奏したのか、企業として成功したようである。明治四十一年（一九〇八）には弟の与十郎に店を譲っているが、建築家谷口吉生はこの吉蔵の子であり、結局彼はこの店を継がなかったことになる。

昭和五年（一九三〇）十二月十四日に加越能維新勤皇家表彰標〔図2〕除幕式が官民を挙げて行われ、『北国新聞』は詳細にこれを報道した。前日には前田利為侯爵が高岡を経て金沢に入り、八百名が参加して歓迎会が開かれた。午前十時十分花火を合図に式典が開始され、前田侯爵を始め勤皇志士遺族三十九名、師団・自治体・学校代表の来賓が列席し、「参詣者」は千名に及んだ。式典は十時五十分から慰霊祭に移り、尾山神社宮司前田直行男爵が執り行った。正午からは市公会堂に来賓が招かれ祝賀会が行われた。このとき木越は「加賀藩士の事蹟を称えて花の今だ実を結ばざるに散りし最期を想起し感慨無量なるものありとし更に前田侯爵家と地方藩民との連携旧ならんことを望む」と述べた。木越は加賀出身者としては珍しく陸軍大臣までの栄達を極めたのだが、出身地が勤皇に厚いことを強調したいという身びいきな思いを共有したいと述べると同時に、他方で前田家を核とする郷党意識の継続を訴えている。藩閥横行の戦前の日本社会にあって、前田家当主（このとき近衛歩兵第二連隊長）を始め、一定の地歩を獲得できたことで、近代社会への参画を自足的にであっても再確認しておきたいというこの地ならではの微妙な意識構造をうかがうことができる。

この日に合わせて、勤皇家表彰会は『加越能維新勤皇史略』を編集発行した。ここに建設の経緯が詳細に記されている。前田像を制作した吉田三郎はこの翌年帝国美術学校教授となるのだが、明治二十二年金沢市の長町に大工棟梁吉太郎の長男として生まれ、石川県工業学校に入学し、窯業科製陶部で板谷嘉七教諭に指導を受けた。子息の回想によれば（『北国文華』第二十七号、二〇〇六年三月）、吉田三郎は欄間彫刻をよくした父の指示で彫刻家を目指し、明治四十年に東京美校彫刻科に入学し、在学中の四十三年に《たちんぼ》で文部省展初入選を果たした。長く朝倉文夫塾で指導者として活動し、大正八年には特選を得て、順調に作家生活を歩んだ。

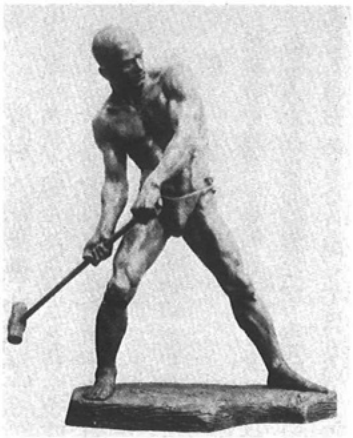
彫刻の世界では、昭和二年（一九二七）には構造社が発足し、四年からは綜合試作と称して複数の作者によって、あらかじめ定めたテーマについてのモニュメント制作が実行された。これは彫刻作品の社会的使命を作家自身が自覚した運動であると同時に、大規模なモニュメントを共同制作によって実現しようとしたてんで、表現の直接性から作品の表象性、共同性へと彫刻の可能性を大きく踏み出させたてんで画期的であった。この背景には欧米におけるモニュメント製作の事例が知られていたことや、ファシズムないし社会主義によるイデオロギッシュなプロパガンダの一翼を彫刻が担っていた事実があった。それは一方で政治的意欲の表明であると同時に科学技術を始めとする人知の誇示を表象する傾きを帯びていた。

吉田三郎はこの少し後の昭和九年（一九三四）の帝展に《航空》を出品しているが、この像を核とした航空碑（設置は昭和十年、現存）〔図3〕、を完成させている。この碑は大正十二年から昭和七年まで東京帝大航空研究所所長を務めた斯波忠三郎を顕彰するものであったが、斯波の父蕃は幕末に家老を務め、慶応四年には戊辰戦争に出陣し、長岡攻防戦に参戦し、この功績により明治三十三年男爵に叙せられた。斯波忠三郎は昭和六年所長として「長距離機設計制作の計画」予算の獲得に成功し、これが昭和十二年（一九三七）当時の航続距離世界記録を達成した航研機となって実を結ぶことになる。碑は地面を蹴ってまさに滑空しようとするかのごとき人体像を頂点とするひきしまった構成で、空を飛ぶというテーマを一個の人体のもたらす躍動と緊張によって表象し、航空機開発というこの研究所が担った時代に先駆ける意気と位置とを表現しようとしている。

同じ昭和九年の帝展彫刻部には、梁川剛一《平和工作の響》（特選）〔図4〕や畑正吉《スタート》〔図5〕が出品されている。いずれも芸術作品が社会的命題を表象し、描き出された人間の行為が担おうとする時代精神

を表現した作品である。とくに畑の作品は一九三六年ベルリン・オリンピック芸術競技に出品される作品であり、日本人の強い姿を示すことで、世界情勢への不遜な威圧すら表現しているように感じられる。また、梁川はこの後一九三〇年代後半からは『少年倶楽部』を始めとする児童文学の挿絵作家として成功するのだが、決して彫刻を捨てたわけではなく、戦後にも昭和三十三年（一九五八）に函館に《高田屋嘉兵衛像》という大作を制作している。

3　航空記念碑　1935年



4　梁川剛一《平和工作の響》1930年

5　畑正吉《スタート》1934年

前田健二郎は一九一〇年代から多くのコンペで入選を果たした腕利きであり、日本橋高島屋・京都市大礼記念美術館（ともに一九三三年）で知られる建築家である。従って、この時代にあっては一直線なモダニズムとは一線を隠していたことは明らかだろう。前田の設計なのか、島田の意図なのかは明らかにできないが、台座は前田慶寧像を本尊とする拝殿のような構造をもっている。イオニア風なオーダーを配してはいるものの、銘板の前の狛犬風な置物や香欄風な手すり、階段両脇の灯籠風な照明はいずれも日本建築そのままではないものの、モダニズム風な造型で明らかにそれを連想させるデザインとなっている。

これ以後、このいかめしい記念碑は兼六園の見所の一つとして多くの人々の眼を集めたはずである。しかし、他の銅像と同じくこれにも戦時供出の運命が待ち受けていて、昭和十九年一月十二日献納奉告祭が金沢神社宮司によって行われ、十四日に銘板ともども台座から取り外された。『兼六園全史』（兼六園観光協会、昭和五十一年）に、昭和二十一年八月この像は富山で発見され、金沢市から譲り受けた真柄要助が金沢西別院に寄贈したと記されているのを読んで驚いたのだが、これは別な鋳造品と取り違えたもののようである。ただ、この真柄要助とは幕末から金沢で新しい建物に挑んできた真柄組の当主であり、西別院（嘉永元年）や尾山神社（明治六年）の建築に携わっている。

第二次世界大戦が終わった時には記念標は台座ともども撤去されており、跡形もなくなった。昭和二十一年、長谷川邸跡地は初めてのメーデー会場にあてられ、二万人の市民で埋め尽くされたこともあった。その後今日に至るまで、再び元治の変を顕彰しようという動きは現れず、現在は新たに整備された梅林の一部となっている。かつて記憶を呼び覚まさなくてはならないとされた歴史に戦後民主主義に基づく地域研究や伝統文化顕彰の俎上にあげられる機会は与えられなかったようだ。また、吉田三郎の個展が平成十三年（二〇〇一）旧表彰標と至近の石川県立美術館で開催されたが、表彰標は航空記念碑とともに展示には取り上げられなかった。それは恐らくこの顕彰が大藩の体面に沿う性格を色濃く持っており、戊辰戦争戦死者の慰霊のように民衆レベルでの歴史感覚に訴えるところが希薄であったからなのか、日本武尊像の明治紀念標がGHQから指摘を受けながら懸命に守られたのとは対照的なのである。

# 一寸

第五十号　二〇一二年五月

第五十号目次

新・旧刊案内50　陸軍省の冬崖・川上寛　青木　茂　1
一條成美考　岩切信一郎　14
時に抗いし者たち――私の小菩薩峠（6）　大谷　芳久　23
近代日本画の構図決定格子（一二）――雪舟のんべんだらりの記　金子　一夫　62
亜欧堂田善『医範提綱内象銅版図』メモ　丹尾　安典　68
銅・石版画遺聞45　森　登　76
忘れられた記憶――前田慶寧像について　森　仁史　83
資料・絵葉書「浅草」　山田　俊幸　86

## 新・旧刊案内50　陸軍省の冬崖・川上寛

青木　茂

・表題のようなことをしばらく前に思い付いて驚いたことは、僕は測量や地理・地図についての歴史など殆んど何も知らないし何を読んだらよいかも分らないことだった。それに新本・古書屋さんの棚を見ても測量史の図書は伊能忠敬についての本以外にこれまた何もないらしいことだった。僕の無知さ加減は本誌先号の『測量便蒙』（明治八年、陸軍文庫）についての雑文をお読みになるまでもない。日本地図センターとか日本測量協会とか日本国際地図学会とかの機関紙もあるようだが、目次を見ると大学や研究所の紀要のように仲間の何人かだけが喜びそうな大仰なタイトルで、僕などは通覧できそうな図書室もなくお呼びじゃないようである。

そこで先づ読んだ治水・利水の専門家らしい金関義則著の『地図つれづれ草』（一九七五年、みすず書房）の引用から始めたい。

「地図製作の歴史をまとめたものとしては、高木菊三郎『日本地図測量小史』（古今書院、一九三一年）が公刊されているだけである。」

「兵部省参謀局間諜隊から始まった陸軍の地図作製の底辺を支えたものは測手である。一将功なって万骨枯るの悲劇はここでも例外ではなかった。最前線の兵士よりももっと危険な状況で身命をなげうった測手の作業は、機械化の進んだ現在とても軽視することはできない。」

「利根川の中流、下流地域については幸いなことに、陸地測量部の迅速図と呼ばれる二万分一図が一八八五年前後に測量されているので古い河相をかなり細密にとらえることができる。」

「陸軍（当時は参謀本部陸軍部）が最初に作製した二万分一地形図は、経緯度測量をともなわず俗に迅速図と呼ばれている。東京湾の潮位として霊